

札幌の秋（大野恵造）

アカシヤに 秋の 風 たつ 並木道

いつ 散るとなき 病葉の

胸に 秘めたる おもかげよ

死ぬまでに 一度 逢わんと

言いやらば

君も 微かに うなづく らんか

そつと ポストに 投げ 入るる

この囁きに その女の

応えは たとえ あらずとも

永久に 残らん 永久に 残らん

愛の 消印

解説 大野恵造作の「啄木の四季」の一節。

函館の小学校で代用教員をしていた啄木は、八月の函館大火で勤めていた小学校と新聞社が焼失し、住居も仕事も失ってしまします。啄木は友人のつてで札幌の新聞社に勤め先を見つけ、列車で札幌までやって来たのです。当時の北海道は、多くの新聞社が設立され、また淘汰された激動期でも有りました。啄木は、北門新報社に、校正係として採用されましたが、ライバルの北鳴新報に、野口雨情が記者として働いていました。二人はこの札幌で出会います。そして、新しく創業する小樽日報で働かないかとの誘いがあり。啄木と雨情は意気投合し小樽日報に就職した。啄木にとり、月給二十円の三面記者待遇は、悪い話ではないので、札幌を去る決心をした。

語釈 ※病葉Ⅱ病氣や虫のために変色した葉。※おもかげⅡ心に思い浮かべる顔や姿。※応Ⅱ呼び掛けられて返事をする。応答する。※消印Ⅱ郵便切手やはがき、等が使用済であることを示し、無効化して再使用できないようにするために捺印される印である。

通釈 秋の風がアカシアの並木道を揺らす。そのアカシアの病葉が散る様子は智慧子を思いだす。

短歌 死ぬまでに一度会おうと言ったが、君は微かにうなずいたね。（啄木の一方的な思いか？）

手紙を書いてポストに投函する。手紙の応答は無くともこの手紙は永久に残る自分の愛の消印である。